

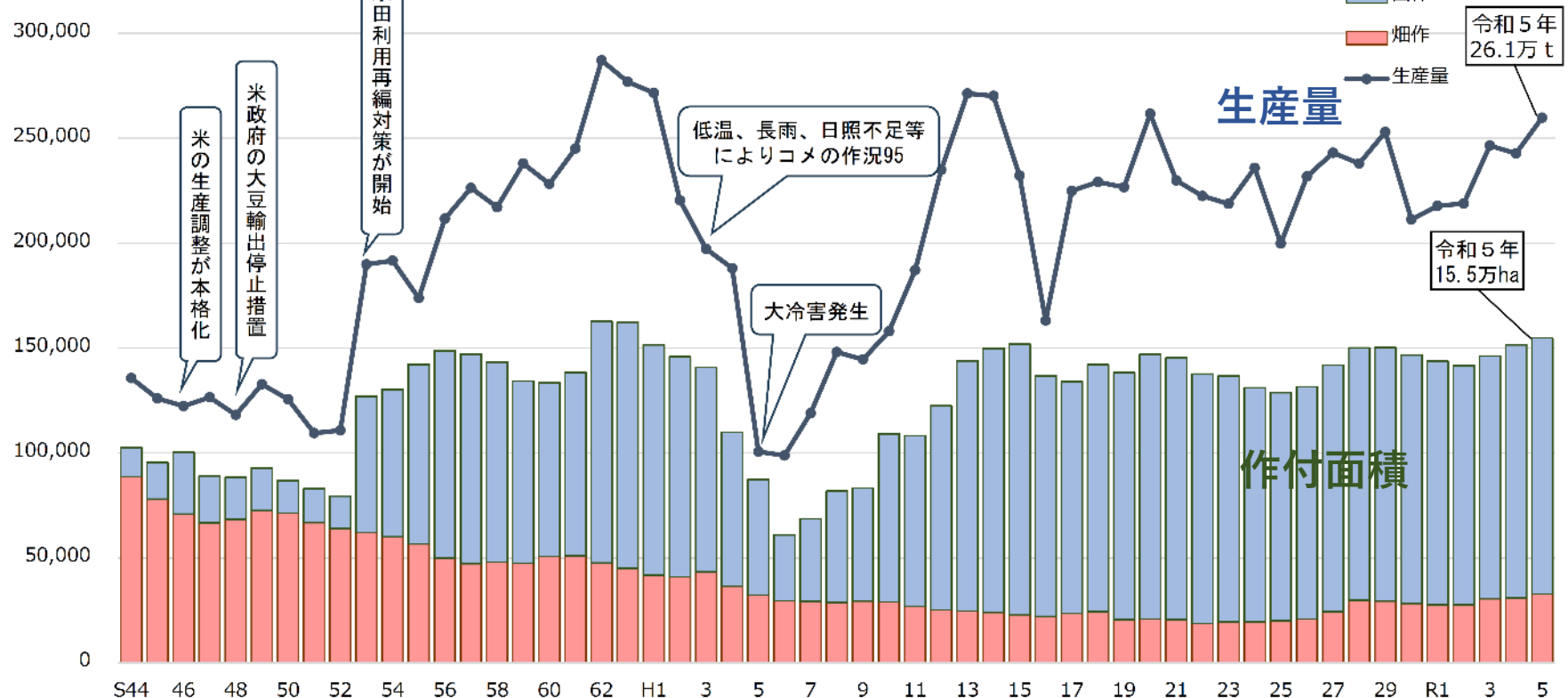
国産大豆生産の現状

7-1 生産量・作付面積の推移

- 昭和53年から開始された水田利用再編対策により、大豆等に重点を置いた転作が推進され、大豆の作付けが急拡大したが、平成5年の冷害により米の作況が著しい不良となり、米が不足したこと等から大豆の作付面積が一時的に減少、その後、米の需給状況等に応じ、作付面積は増減しつつ今日にいたる。
- 令和5年度の大豆の生産量は、北海道及び九州において、生育期間がおおむね天候に恵まれ、着さや数が多かったため、前年比7%増の26万0,800tとなった。
- 令和5年産の作付面積については、全国的に増加し、前年比2%増の15万4,700haとなった。

(単位：ha、トン)

国産大豆の生産量・作付面積（田畑別）の推移





16 食料・農業・農村基本計画

- 令和2年3月に閣議決定された「食料・農業・農村基本計画」において、大豆の生産努力目標を34万トンに設定。
- 実需者の求める量・品質・価格に着実に応えるため食品産業との連携強化を図りつつ、団地化やスマート農業によるコストの低減、排水対策の更なる強化、耐病性・加工適性等に優れた新品種の開発・導入等を通じて、生産量の向上を推進する。

H30（現状）

生産量 21万 t
 作付面積 15万ha
 平年収量 167kg/10a
 自給率 6%

R12（目標）

生産努力目標 34万 t
 作付面積 17万ha
 平年収量 200kg/10a
 自給率 10%

収量向上
が鍵

国産原料を使用した大豆製品の需要拡大に向けた生産量・品質・価格の安定供給

- ・播種前契約の推進
- ・安定供給体制の構築に向けた民間保管体制の整備



耐病性・加工適性等に優れた新品種の開発導入の推進

- ・地域に最適な稲・麦・大豆の品種の組合せと栽培法の確立実証の実施

センシング技術を活用し品種の組合せと栽培方法を最適化



ほ場条件に合わせて単収向上に取り組むことが可能な環境の整備

- ・スマホWeb診断等、生産者自らが圃場毎の低収要因を把握し改善する取組を推進

Web診断



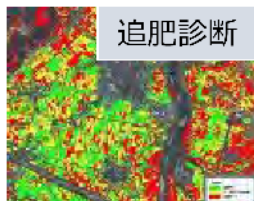
団地化・ブロックローテーションの推進、排水対策の更なる強化やスマート農業の活用による生産性の向上

- ・補助暗渠施工、心土破碎等の営農排水対策による排水性改善



心土破碎

- ・生育予測システムや営農データの活用法の周知・現場への浸透



追肥診断

スマート農業の活用



- ・人への集積・集約と作物の集約を連携して実施

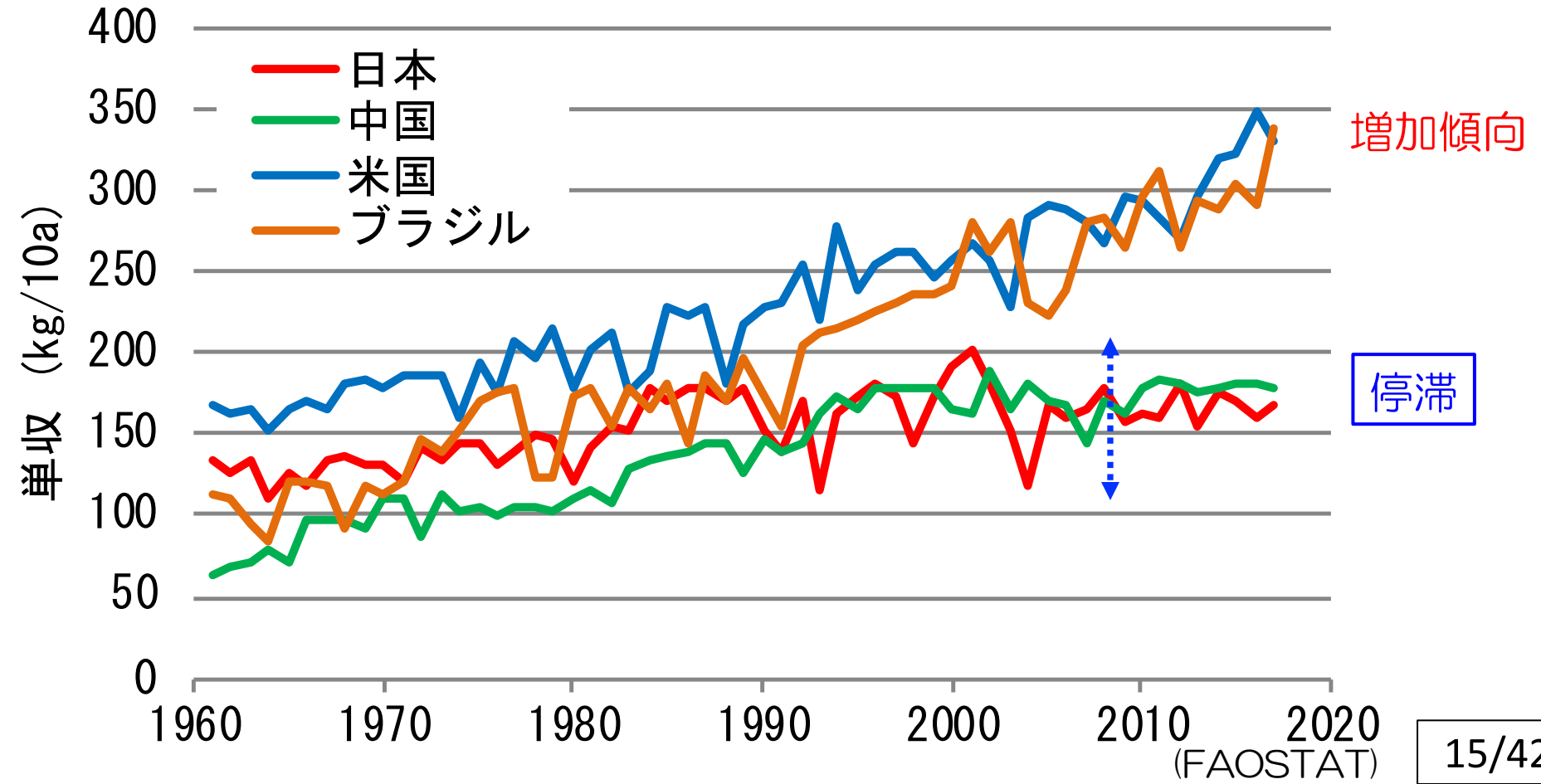


団地の推進

日本の大豆単収

令和5年産 全国：169 kg/10a、
 （北海道：255 kg/10a、都府県：133 kg/10a）

日本の単収は1985年頃から**停滞**、米国・ブラジルは**増加傾向**



大豆単収停滞の原因（府県）

◆ 気象による影響（異常(極端) 気象含む）

播種時期（５～６月）の長雨・豪雨	→	湿害、苗立ち不良、播種遅れ
播種・開花～登熟期 の高温・干ばつ	→	苗立ち不良、落花、虫害の多発、青立
台風（巨大化、回数の増加）	→	倒伏、腐敗
成熟（収穫）期の長雨	→	腐敗、刈遅れ、裂莢

◆ 地力低下

◆ 新品種の導入が進みにくい

既存品種（リュウホウ、ミヤギシロメ、おおすず等）が”ブランド化”し、利用者（実需者・消費者）がこれらの品種を求めるため、新品種の導入が進みにくい。

◆ 品種の収量性の向上が進んでいない

品質（タンパク質含量・粒大）を重視した育種選抜が行われてきており、収量性を高める育種が進みにくかった。

多収品種の開発と 「そらひびき」の紹介

NARO

大豆収量の世界記録



• 2010年、USA・Missouri州のKip Cullers氏が
1081kg/10aの世界記録を達成。

- 土壌物理性が良い土壌に鶏糞を多投して肥沃土を高く維持。
- 4月14日播種（早播）、9月28日収穫。
- 生育調節剤で倒伏を抑制。
- P、K、微量元素を混合した灌漑水を頻繁に散布。
- 病虫害と雑草の防除。

2012年～
多収品種の開発
に着手

2016年、USA・Georgia州の
Randy Dowdy氏が
1155kg/10aの世界記録達成。
2019年には
1279kg/10aの世界記録を更新。



<https://www.agweb.com>より

2023年、USA・Georgia州の
Alex Harrell氏が
1391kg/10aの世界記録を達成。
2024年には
1468kg/10aの世界記録を更新。



<https://www.agweb.com>より

500kg/10a以上を目標に、
外国の多収品種（UA4805、Santee、LD00-3309等）
を交配母本として利用

（先導プロジェクト、2016～2020年）

- 外国の多収品種を積極的に利用
- 育成試験および生産力検定試験
- 子実収量に基づく選抜に重点化

供試系統数の拡大



東北、関東、四国、九州の各育成地で多収系統を開発

プレスリリース



農研機構

2023 年 11 月 7 日

農 研 機 構

収量が高く豆腐に利用できる
ダイズ新品種「そらみずき」、「そらみのり」
ーダイズの安定生産と供給に貢献ー

農研機構は、収量が高い米国品種と加工適性が高い日本品種との交配から、多収で豆腐に利用できるダイズ新品種「そらみずき」、「そらみのり」を育成しました。「そらみずき」（関東 146 号）は関東～近畿地域、「そらみのり」（九州 187 号）は東海～九州地域が栽培適地で、いずれも既存の品種と比較して 3 割以上の多収が見込まれ、ダイズの安定生産と供給に貢献することが期待されます。

プレスリリース



2024 年 6 月 11 日
農 研 機 構

収量が高く豆腐に利用できる ダイズ新品種「そらひびき」、「そらたかく」

— 東北南部～北陸、東海～九州地域のダイズ生産量向上に貢献 —

農研機構は、収量が高い米国品種と加工適性が高い日本品種との交配により、多収で豆腐に利用できるダイズ新品種「そらひびき」、「そらたかく」を育成しました。「そらひびき」（東北 194 号）は東北南部～北陸地域、「そらたかく」（四国 46 号）は東海～九州地域が栽培適地で、既存の品種と比較して「そらひびき」は 2 割以上、「そらたかく」は 5 割以上の多収が見込まれ、2023 年 11 月に公表した「そらみずき」、「そらみのり」¹⁾に続いて、ダイズの安定生産と供給を加速化することが期待されます。

農研機構の多収品種育成と普及の取組

多収品種の普及見込み栽培地域

● 育成地

○ **そらたかく**
2024年品種登録出願
普及予定：近畿、中四国、九州

○ **そらひびき**
2024年品種登録出願
普及予定：東北南部、北陸

○ **そらみずき**
2023年品種登録出願
普及予定：関東、東海、近畿

○ **そらみのり**
2023年品種登録出願
普及予定：九州～東海

